



花野・考

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

今年の四月に入ってこの「花野の娘」(原題「娘の骸骨」)に出会った。

思うところあって今まで選んできた昔話とその語りを見直そうと考えている。新しい話の選択にもより慎重でありたい。そこで四月、身の周りに手持ちの語り資料のいくつかを並べて目を通してみた。そこにこの話があった。角川書店刊『日本の民話』シリーズ第六巻「土着の信仰」の中の一つ。東北地方の昔話。再話は松谷みよ子だ。発行昭和四十八年九月二十五日。その初版本。今から五〇年前、昔話に興味を持ち始めた比較的早い頃だ。それから数えきれないほど手にした資料の一つなのに、「花野の娘」は見過ごして

た。「娘の骸骨(しやれこうべ)」という少しおどろおどろしい原題を目次で見て、俺の世界と違ふと怖気付いた気配もある。それが今度なぜか読む気になってページを開いた。一読、心に染みた。理由はいくつもあるが、その大きな一つが「花野」というしみじみとした響きの美しいことばとその使われ方のみごとさだ。それはこの物語の主人公の一人である爺だけの持ちことばとして二度出てくる。その二度が物語の冒頭部と終末部にびったりと揺るぎなくはまって見事なのだ。民衆が持つ語彙のゆたかさとその使い方の適確さに心を打たれた。

初めは爺の単なる楽しみへの期待から口を出ることばとして何気なく語られる。それが物語の終末にはがらりと変わる。主題のもつ一つの側面を担う、家长的家族制度にはじき出された美しい娘の悲惨といえる運命を人知れず包み続け、爺との出会いを寓意してやる花野へと大きく意味を深めて語りを終える。暗喩としての自然の力を感じてしみじみと美しい。

「花野」は秋の季語で、春に使われているのは変などと野暮をいわないで欲しい。『歳時記』の分類は江戸俳諧隆盛以後の話。もともと春も夏ももちろん秋も花野はあった。人によっては雪原を花野というかも知れない。日本語の懐は深い。

つい最近、黒田清輝の最晩年の未完の絵に「花野」があるのを知った。野辺に伏す三人の裸婦を大きな自然が包む。私の新しい出会いはこうして広がる。



第 28 便
2024.8.1
塩田平民話研究所
[事務局]
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2
☎0268-49-1231
✉shiodadaira.minwaken@outlook.jp
http://www.shiodadaira.minwaken.net

木霊

梅雨時の花と言えば「紫陽花」だが、金木犀、沈丁花と並ぶ香木の一つ「くちなし」も、その頃に咲く花だ。最近、そのくちなしの話題を続けて二度、耳にした▼一つは「昔ばなし語りの会」で語られる民話「クチナシの娘」。人間の猜疑心と慢心によって、クチナシの化身である娘の純真さが踏みこまれてしまう悲しいお話。人間界と物言わぬ自然界との隔たりをも感じさせられた▼もう一つは日本歌曲「くちなし」という曲を聞く機会があった。歌詞の内容は、くちなしの花が咲く季節になると、亡き父の言葉を思い出す、というもので、歌詞の一節は「くちなしの実のように待ちこがれつつ ひたすらに こがれ生きよ」と父はいう。今もどこかで父はいう。果実が熟しても口が開かないくちなしの実から、ひたすらにこがれる思いを胸に秘め、その道を真っ直ぐに進みなさい、という言葉は、心が揺さぶられる▼民話と日本歌曲、二つの内容は違うが、不思議に「くちなし」から、人の心にも通じる芯の強さを感じた。



(道子)

狐民話の底流

論考

本年度の研究テーマは、昨年に引き続き「千曲川右岸の民話」。昨年は「白山信仰（山岳信仰）」に焦点を当てたが、今年は「狐民話」を取り上げることにした。千曲川右岸、とりわけ上田市真田地域には、狐民話がいくつも残っている。「魚取りと狐」「狐の恩返し」「山遠家の狐」などがそれぞれだ。

「魚取りと狐」は、大漁の魚を家が火事と思わせた狐に横取りされる。「狐の恩返し」は、村長にやさしくされた親子の狐が、娘に化けて馳走し、土産の玉手箱には美しい女が潜んでいる。「山遠家の狐」は、出迎えに出た息子に化けたいたずら狐を逃がしてやると、約束した蘭が一鉢贈られる。いずれも、だまし方に悪辣さがない。

狐は『日本書紀』『万葉集』にも登場するが、説話となる最初は、平安初期の『日本霊異記』。男と夫婦になり子を儲けた狐が犬に追われて姿を現すが、「いつでも来て寝ていけ」と夫に言われ、やって来ては共寝する。「来つ寝（キツネ）」の語源とされる。

『今昔物語』（平安末期）には、若い女性に化けた狐と契り、13日間、蔵の床下で暮らした男の話が載る。初出は『扶桑略記』。時代が下がり、室町時代になると、御伽草子として「狐の草紙」「木幡狐」「玉水物語」などが著される。

その後、室町中期には安倍晴明が陰陽師として活躍し、彼の出自を語る形で「信太妻伝説」が生まれ、江戸時代に入って仮名草子に



月岡芳年
「葛の葉きつね童子にわかるるの図」

集成され、さらに浄瑠璃・歌舞伎・人形浄瑠璃に取り入れられて一世を風靡する。安部保名に助けられた狐が葛葉に化けて結ばれ童子丸（のちの清明）を儲ける。童子

丸7歳のとき葛葉は正体を見られ、歌を詠んで信太の森に帰る。いずれの話も、狐は若い娘に化ける。陰陽道で、狐は陰獣であることによる。が、例外もある。人形浄瑠璃や歌舞伎の演目『義経千本桜』に登場する源九郎狐は佐藤忠信に化ける。真田の民話「山遠家の狐」も男児に化けている。狐はなぜ化けるようになったのか。狐は、獲物（とりわけ好物の鼠）を獲る際、気づかれぬように高く飛び跳ね、前足で捕えて啜える。あたかも空中で回転するか

川西有線放送で「昔ばなし」を毎月放送

川西有線では、昨年より塩田平民話研究所の皆さんにご協力頂き、毎月1回、日曜日の夜7時から『民話の時間』を放送しています。

主に川西地域の民話を中心に近隣地域、そして全国と、数ある民話の中から語り手の皆さんが選んで、有線本部で収録をした番組です。語り手も小学生から90代と幅広く、番組を聞いた加入者さんからは「よかったよ」、また、学生さんからは「この声、懐かし

のようだ。そのシルエットは、女性の姿に見えなくもない。狐と人間の関わりは、稲作の始まる弥生時代まで遡る。稲作の害獣、鼠を捕食してくれる狐は神聖視され、田の神となる。秦氏の創始した稻荷神社信仰で眷属となり、全国に波及する。密教がもたらされてからは、白狐に乗る茶枳尼天（ダキニ天）が輸入され、稲荷と同一視される。「狐火」「狐の嫁入り」「狐憑き」「狐持ち」など、狐に関わる俗信も、多々ある。（弘）

川西有線放送 水沢 豊美

い：保育園思い出すなあ」「そんな言い伝えがあったんだね。初めて知った」など、多くの感想が寄せられています。

声はいつまでも残り、音声だけで聴く民話は、目を閉じその情景を思い描き、実に奥深さを感じながら、語り手の皆さんの磨かれた表現力に癒されています。

『民話の時間』になると、不思議と肩の力が抜けてほっこりした気持ちになり、大切にしたい時間になっています。

ふるさとの 民話探訪 24 千古の淵

昔はあちこちの池や川に河童が棲んでいた。塩田の甲田池には椀を貸してくれる河童が、和田の野々入には骨接ぎを教えた河童がいた。

ある時河童は、傍陽村の清七の馬の尻尾をつかんで淵の中に引っ張り込もうとした。驚いた馬が跳ね上がった拍子に河童の皿の水がこぼれて神通力をなくし、清七の家に連れて来られてしまった。家にいたおかみさんに柄杓で殴られ、わずかに残っていた柄杓の水が頭の皿にかかって命からがら逃げ帰った。それからは千古



の滝壺に子どもが引き込まれることはなくなったという。また、この滝に棲む河童から、助ける代わりに膏藥の作り方を教えてもらった話も残っている。昨年7月、探訪に訪れた日は雨だった。洗馬川は水嵩を増し、千古の淵にどうどうと流れ落ちていた。雨に濡れた木々がうっそうと茂り、淵は薄暗く近寄れなかった。濡れた岩にひよっこり河童が出てきそうな気配を感じた。

千古の滝の下流で洗馬川は神川と合流する。飲み水としても、農業用水としても大切な神川の水を河童は今も守り続けてくれているに違いない。(弘子)

新聞・テレビ 全国メディアで 発信 『龍の子太郎』テーマに 民話研

A新聞の元旦特別号に、「龍の子太郎」の源流を訪ねる記事が掲載され、塩田平民話研究所が案内役として登場している。そのことは、前号の「編集後記」にも書いた。記者の取材を受けたのは、昨年11月12日。

3月22日にロケ取材が行われた。こちらも、「龍の子太郎」のふるさとを訪ねる内容。産川のほとりで俳優の相島一之さんに声をかけられ、松谷みよ子さんの創作民話「龍の子太郎」は小泉小太郎伝説に端を発したものであることを話しながら、鞍淵・とつこ館を案内。その後、「小泉小太郎」の語りを聞くために稲

垣所長を訪ね、稲垣庵で相島さんが語りを聞く。一行6人。一日がかりのロケになった。一行は翌日、「小泉小太郎」を取材するために大町市へ。番組は、島根県のシンデレラ伝説と抱き合わせ、1時間55分。4月28日にBSのFテレビで放送された。奇しくも続けて二つのメディアに登場した民話研究所。さらに精進を重ねたい。(弘)



産川

辰年に因み、全国区での露出が続いたせい、松谷みよ子さんのことを思い出した。信州中野の北信病院で同僚だったというオバとの縁も、上田・塩田平まで彼女を誘った▼子どもの頃お目にかかった折にプレゼントされた『ぞうとりんご』は、類書の『かわいそうなぞう』でも有名だ。子ども心にも戦争の酷さにふるえたが、子どもに眼に映る松谷さんはひよろつと背が高く、静かな女性だった▼ご本人の手になる自伝によれば、「小泉小太郎と泉小太郎、この二つの物語はもとは一つの物語にちがいない。『せむしの小馬』のように、私もこの小太郎の物語を一つの長い物語にしよう」と決心して東京に戻り、さつそく木下順二さんの『民話の会』で報告すると、すでに柳田國男が『桃太郎の誕生』の中で、その二つの小太郎の話は「もとは一つならむ」と発表しておりがっくりした」が、それから数年を経て名作『龍の子太郎』が生まれたというのである。(きなこ)



塩田公民館 夏休み 子ども講座 「怖い話」

塩田公民館 正村 泉子

昨年8月8日、子ども達に民話に親しんでもらうことを目的に、夏らしく「怖い民話」をテーマに企画しました。

新講座ということで、参加人数等、全く予想ができない状態でしたが、24名の方に参加いただき、未就園児のお子さんから小学生、保護者の皆様にも好評の講座と

なりました。

和ろうそくに照らされた語り手の雰囲気におおされる子、お母さんの後ろに隠れる子、「全然怖くないじやん」と余裕そうな子、寝転びながらも真剣に聞いている子、どの子も反応はそれぞれでもお話に



夢中な様子でした。今年もまた聞きたいとの声があがり、今年も8月8日に開催する運びとなりました。この講座で知った民話をクラスメイトに話したり、お盆で会った親戚に昔話を聞いてみたりして、民話を通じて世代間の交流を図り、他地域の民話を通じて、全国の風習に興味を持って調べて、子どもたちが自分の世界を広げるきっかけとなることを期待しています。

民話とわたし Ⅲ — フランスから塩田平に —

塩田平民話研究所新入所員

塚越 紗衣

画 塚越紗衣「独鈷山」



民話と言われて思い出すのは、子どもの頃、毎週土曜の夜7時から家族と見ていたテレビアニメ「まんが日本昔ばなし」のことです。私は、家族みんなで過ごすこのあたたかい時間が大好きでした。お話のカセットテープも持っていて、寝る前などによく聞いていました。印象に残っているもの一つ「しっぽの釣り」は、寒い冬の夜に、凍った湖の上に空いた穴に、しっぽを垂らして魚を釣るきつねのお話なのですが、市原悦子さんと常田富士男さんの語りを聞くと、しっぽが冷たくて痛そうだと思っていた当時のことが懐かしく蘇ってきます。3年ほど前まで、私は約8年間フランス南東部にあるグルノーブルという町に住んでいました。町は三つの山脈に囲まれた盆地で、町を囲む山脈の一つには、塔のようにそびえたつ三つの尖った岩があり、トロワ・プセルと呼ばれていました。ある日、友人から、この岩には恋に絶望して岩になってしまった3人の娘の伝説があるのだと教えてもらい、それ以来、私は岩を見るたびに3人の娘のことを思うようになりました。お話によって、人との交流が生まれたり、その場所が特別になったりするのは感じました。

私はこの3月末に上田市に越してきたのですが、ちょうどよいタイミングに、とつこ館で「昔ばなし語りの会」―春を呼ぶ話が行われており、会の雰囲気が入って、この度、お仲間に加えていただくことになりました。塩田平民話研究所のページを見つけたのは、塩田平・民話 というキーワードで検索していた時でした。私は旅や山が好きで、ここに越してくる前の2022年にも独鈷山にのぼったことがあったのですが、独鈷山からみた塩田平が美しく、池が多いなあと思ったのを覚えています。それから塩田平が民話の宝庫であることを知り、この地域や民話を知りたいという思いから、塩田平民話研究所に知らず知らずのうちに惹かれてここにたどり着いたのだと思います。民話を通じて、昔の人たちに思いを馳せたり、当時の風景を想像したりするのが好きです。自分で語れるお話を少しずつ増やしていければと思っています。

事務局だより

◆総会を5月1日(水)に行いました。

◆以下の催しを計画しています。

「昔ばなし語りの会」

- 上田創造館 6月30日(日)
- 8月18日(日)
- 2025年1月26日(日)
- とつこ館 3月23日(日)
- 「民話語りっこ学びっこ」
- 川西公民館 11月10日(日)

編集後記

裏金問題を取り繕うために、政権与党が提出した「改正」政治資金規正法が成立した。抜け穴だらけのザル法だ。裏金はまた温存される。国民は、裏金政治家たちを許してはいない。でたらめな政治を正すには、政権交替するしかない▼このところ、民話研の存在感が増している。多方面から、新たな企画のお誘いを受ける。川西有線放送、塩田公民館夏休み子ども講座、新聞・テレビ取材、どれも去年から今年にかけて始まった取組み。フレッシュな所員も入所した。また新たなページを開いていきたい。(弘)

